

宮林 英子 [会長]

落合野鳥の会



東京から落合に転入したばかりの昭和 49 年 4 月 3 日朝、隣家のおばあさんが「今日は大豆を播く日じゃ、枝豆で食べてもいいし」と種を下さった。そして「一粒は畑の神様に、一粒は土の中の虫たちに、そして一粒はどうぞ私のために云うて、3粒ずつ播くんよ」と教えてくれた。お百姓さんはこんなにも豊かな心で農作業をしておられたのかと、農家を知らない私は衝撃を受けた。生物多様性年などと言われるまでもなく、お百姓さんたちは自然の力を十分に知っていたのだ。ところが田んぼに機械が入り、農薬の使用が推奨されるようになると、自然への畏敬の念は忘れ去られたように思う。

平成 4 年、当時の落合町広報誌に「誌上探鳥会」と題して 2 年近く、身近な野鳥について書かせていただいた事が、翌 5 年の落合野鳥の会誕生につながった。18 年後の今日、会員は 90 名を超え、月 1 回の探鳥を楽しんでいる。土地柄、休日は農作業日であり探鳥会に参加できる人は少ないが、隔月に発行する会報「やませみ」で情報を交換している。野鳥写真や探鳥記、

宮林 英子 氏

1947 年生まれ
長崎県出身
草月流いけばな教室主宰
落合野鳥の会会長
日本鳥類保護連盟岡山県支部監事

星空散歩など、会員による連載記事は「やませみ」の自慢のコーナーであり、この 5 月に 106 号を発行した。

平成 13 年には、町を流れる備中川改修時に、県に要望して堤防にカワセミブロックを設置していただいた。県下 2 例目の設置で順調に子育てを繰り返していたが、3 年前にすぐ上流の工事が始まり、周辺の木が伐採されるとブロックでの繁殖は見られなくなった。工事終了後に、会で環境を整えるつもりだ。



備中川のカワセミブロック
平成 16 年には右から 2 番目の穴で 3 番子まで育て上げた

また小学校や子供会から依頼を受けての探鳥案内では、望遠鏡の向こうに見える鮮やかな野鳥の姿に、驚きと興奮とで輝く子供たちの笑顔を見るのが楽しい。彼らが成長して真庭を出た時に、故郷がどれほど豊かで美しいところであったかを理解するだろう。

野鳥観察を通じて、地球環境がもたらす絶妙な循環システムを学んだ。植物を土台に、様々



探鳥案内
真庭市立木山小学校 3 年生
2011.3.15 くもり

な生きものたちが織りなす自然は、私たちに水や食料を提供してくれる。ふんだんに使う水は野鳥の声であふれる広葉樹の森から湧き出しており、この水を工場で作ることなどできないし、その森を人間だけの力で守れはしない。私たちは緑濃い自然に護られて生かされていることを知った。

高齢化が進む真庭では草取りもままならず、薬剤に頼るうちに田圃に生きものが減り、自然の循環システムは各所でほころび始めている。昭和 49 年春に昼夜を分かつたず、降るような野鳥のさえずりを聞いた者として、先人の知恵に学び、自然の力を信じ、恐れ、感謝して暮らす仲間をひろげたい。

東日本大震災では想像を絶する自然の猛威を見せつけられた。罹災地域の広さ、悲惨さに言葉を失う。

かの地に再び草木が繁り鳥が歌う穏やかな日常が、1 日も早く戻ることを願って止まない。